

「日本留学奨学金同窓会」の開催

日本台湾交流協会台北事務所 広報文化部

2023年3月5日（日）、日本台湾交流協会台北事務所は、日本奨学金留学生聯誼会（以下、聯誼会）と協力し、シェラトングランド台北ホテルにおいて「日本留学奨学金同窓会」を開催しました。台湾の各界や日台関係の最前線で活躍する約200名の卒業生が参加しました。

これまでも毎年3月に、聯誼会とともに新しく留学に出発する奨学生の壮行会兼小規模の同窓会を行ってきました。今回は、昨年日本台湾交流協会が設立50年を迎えた機会に、奨学金卒業生の名簿の整理を行い、これまで以上に多くの卒業生に声をかけて大規模に開催したものです。

日本台湾交流協会台北事務所泉裕泰代表挨拶全文（服部副代表代読）

日本留学奨学金卒業生の皆様、こんにちは。そして、おかえりなさい。日本台湾交流協会台北事務所の代表として、皆様を歓迎できることを大変嬉しく思います。



頼浩敏名誉理事長挨拶

本日まで出席の皆様は、日本による奨学金を受給され、日本に留学された方々です。私の手元にある奨学金留学生名簿には、1972年に日本台湾交流協会が設立される前の日本政府国費留学奨学金の時代も含めると、1955年以降、これまで3,100人を超えるお名前が並んでいます。本日まで出席の中で、一番早くに留学を開始されたのは、1965年から奨学金を受給し、京都大学法学研究科で学ばれた邱六郎さんです。また、1966年に東京大学法学政治学研究科に留学を開始された頼浩敏さんは、その後、首席大法官・司法院長を務められました。2017年の秋の叙勲で、日本政府から旭日大綬章を授与されています。頼院長は、いま、奨学金留学生の間の交流を目的とする「日本奨学金留学生聯誼会」の名誉理事長でもあります。

この長いリストを見ると、日台関係に貢献された数々の方のお名前があります。最初の数ページを見るだけでも、許世楷さん、許水徳さん、そして現在の謝長廷代表と、3人もの駐日代表のお名前を見つけることができます。政治や外交の世界だけでなく、例えば1962年から現在の筑波大学



謝長廷台北駐日經濟文化代表処代表ビデオメッセージ

に留学した蔡茂豊さんは、その後台湾の日本語教育の第一人者として活躍され、2005年に台湾人に対する叙勲が再開された際、最初に旭日中綬章を叙勲された方となりました。蔡先生は、残念ながら、一昨年、御逝去されました。

日本台湾交流協会は、昨年、設立50周年を迎えました。1972年、非政府間の実務関係となった日台関係は、まさにどん底からの出発でした。特に当協会設立前後に留学されていた先輩方は大変なご苦労をされたと同っています。その後、日台関係は、山あり谷ありの50年を超え、現在の大切なパートナーとなるまで成長してきました。この間、奨学金を得て日本に留学されてきた方々が、留学を終えて、台湾に戻り、政治・行政・学術・経済・文化など、それぞれの分野の最前線で奮闘されています。皆様が日本との心と心の交流を進めることにより、日本と台湾の信頼と友情が築かれてきました。皆様に心からの感謝と敬意を表します。



1972年以前の大先輩

昨年、当協会設立50年の機会に、当協会では奨学金留学生の名簿の更新を行いました。留学後の卒業生が、日本で勉学に打ち込んだ日々を基礎に、理系文系を問わず、最前線で活躍していることが再確認でき、誇らしい気持ちになりました。今日ここにお集まりの皆様は、3,100人の中の200人ですが、本日の同窓会を機に横の繋がりを広げていただきたいと思います。皆様は、時期は違ったとしても、日本留学経験の仲間です。これほど多くの仲間がいることは皆様の人生にとって貴重な財産だと思います。また、非常に多くの方

が大学で教鞭をとっておられます。教員として、ぜひ日本のことを学生に教えていただきたいと思います。

我々日本台湾交流協会は、皆様を心から誇りに思います。皆様にもぜひ当協会の奨学金留学生であったことを誇りに思っただきたい。そして、ともに日台関係の更なる深化のために、働いていきましょう。ご静聴ありがとうございました。

来賓及び卒業生代表の挨拶

これに続き、来賓の蘇嘉全台湾日本関係協会会長が挨拶し、日台は親密で特別な関係にあり、我々の関係はこれからも更に発展することに期待、台湾の留学生が日本で卒業したなら、将来日本で就職しても、帰国しても、台湾にとって非常に重要な人材になる旨述べました。また、卒業生が集まることは、留学生の横のつながりを広めるだけではなく、日台の友好関係を深める効果があり、今後このような活動をサポートしていきたいとして、将来さらに大規模の同窓会が開かれることに期待を示しました。

聯誼会の頼浩敏名誉理事長は、流暢な日本語で、「私が留学した1966年は、進学することも海外に行くことも容易ではなく、奨学金により海外留学できることは、まるで夢のようだった。貴重な日本での留学経験がなければ、司法院長にもなれなかったかもしれないです。日本政府及び日本国民の日本留学への支援に感謝しており、日本を愛している。恩返ししたいと考えており、これからも引き続き日台友好関係の維持と促進に尽力していきたいです」と述べました。

謝長廷台北駐日経済文化代表処代表は東京から



会場の様子

ビデオメッセージを寄せ、「私も日本政府国費奨学金を受給して1972年4月から留学を開始したが、留学期間中に日本と台湾の国交が断絶したので、将来の不安を感じた」と率直に振り返りつつ、その後、交流協会に変わっても奨学金をもらい続けることができ、学業を終えることができた、日本政府から提供された奨学金に対し、ずっと心より感謝していると述べました。これから留学する学生に対しては、「たくさん勉強し、日本の歴史を学び、人脈を築いてきてほしい」「日本と台湾の友好関係は世界のモデルです。今後世界平和を語るとき、台湾と日本の関係を話すべきです」等、後輩たちを励ます言葉を贈りました。



会場の様子

大先輩の紹介と時間を超えてつながる交流

同窓会には日本台湾交流協会の奨学金のみならず、その前身の国費留学奨学金を受給した卒業生も9名も参加し、司会から紹介されて後輩たちから大きな拍手があがりました。

邱六郎氏は1965年に京都大学法学研究科に留学し、その後法律事務所を開設し、現在でも経営されています。聯誼会名誉理事長の頼浩敏氏は、1966年に東京大学法学政治学研究科に留学し、台湾に戻ってからは大法官や司法院長といった重責を担いました。

余煥騰氏は1966年に京都大学工学研究科に留学し、台北科技大学材料系教授として教鞭をとられました。楊維楨氏は1966年に東京工業大学電気工学研究科で学び、台湾大学工学院名誉教授です。呂昌平氏は1967年に京都大学農林経済学科に留学し、現在では台日文化経済協会秘書長とし

てご活躍されています。陳坤輝氏は1968年に名古屋大学化学研究科に留学し、現在は伍桐股份有限公司の社長として活躍されています。

黄友輔氏は1970年に和歌山大学国際経済学研究科に留学し、台湾三洋半導体で活躍された後退職しました。廖德章氏は1972年に大阪大学高分子研究科に留学され、台湾科技大学化工系荣誉教授です。趙姫玉氏は1972年にお茶の水女子大学文学研究科に留学し、台湾大学日本語文学系教授として後進の育成に尽力されました。

大先輩の紹介の後には、2023年4月から渡日する留学生30名が紹介されました。代表として、京都大学へ留学する張廷睿氏が挨拶し、「留学中は、授業や論文執筆はもちろんのこと、文化交流にも力を入れて取り組みたい」と意気込みを述べました。



会場の様子

当日の様子

あちこちのテーブルで世代を超えて同じ大学や同じ地域に留学した卒業生同士が、思い出話をし、会話がはずんでいました。今回の同窓会を機に大いに親交が深められ、奨学金卒業生同士のネットワークが強化されることを期待します。世代を超えた交流は、今後も社会での活躍が期待される参加者にとって非常に有益な機会になったと考えます。

卒業生の輪を広げて交流を

昨年の名簿の整備の後、当協会では、奨学金留学生への情報提供の強化、奨学金卒業生同士の横

のつながりを更に広げるため、奨学金留学生のメーリングリストを作成しました。交流協会から奨学金や各種助成の情報もお知らせしています。また、協会からだけでなく、卒業生からも発信することが可能になっています。

今回の同窓会の開催に合わせて、当協会のFacebookで、「我的留日人生（私の日本留學生）」という連載を開始しました。5月末現在、13人の記事を投稿しました。これまでの記事において、頼浩敏氏の他、呉采模氏（留学先：一橋大学、万国法律事務所弁護士）、楊維楨氏（留学先：

東京工業大学、台湾大学工学院榮譽教授）等を紹介しています。現在留学中の学生も取り上げており、今後日本留学を目指す学生の人生設計の参考になることを期待しています。

台湾から日本への留學生は重要な役割を果たしています。当協会の奨学金を受給した留學生には、今後も日本と台湾の間の架け橋となっていただきたいと期待しています。将来の日台関係がより良好なものとなることが、日本台湾交流協会の切なる願いです。



参加者の集合写真